

コモンと潤沢さ

斎藤幸平

大阪市立大学

2021年1月7日

パンデミックと気候危機

- 生活が突如として一変した2020年
→これまでの常識が非常識に
=ポストコロナの「ニューノーマル」がどうなるかの分岐点
- そこに加わる気候危機
- 危機の時代にこそどのような対策を取るかによって、未来が大きく変わる大分岐
- V字回復では危機前の道に戻ってしまう = 破局への道
→ **別の道**を模索する必要性

マルクス主義への注目

- 「エコ社会主義」 (ナオミ・クライン)
- 「戦時 Kommunismus」 (スラヴォイ・ジジェク)
- 「エコロジカル・レーニン主義」 (アンドレアス・マルム)
- 「脱成長 Kommunismus」 (斎藤幸平)

→マルクスの枠組みで資本主義システムを問題視し、階級や格差を批判する理論的枠組みが再び打ち出されるようになってきている

マルクス主義と環境問題

- マルクス主義はこれまで生産力至上主義で環境思想とは相容れないと批判されてきた
- 21世紀に入ってから、気候危機が深刻化するなかで再検討
- 「マルクスのエコロジー」の再評価 (ジョン・ベラミー・フォスター、ポール・バーケット)
- 「エコ社会主義」の系譜 (ジョエル・コヴェル、ミシェル・レヴィ)
- MEGAによる新資料の検討 (斎藤幸平、フォルグラーフ)
= 「物質代謝の亀裂」 metabolic rift

物質代謝論

- 労働 = 人間と自然の物質代謝の媒介
- 超歴史的な過程・「生理学的」事実
- 資本主義のもとでの変容・再編成 = 価値増殖に適合化
- 社会的関係と自然的循環の間の緊張関係
→ 攪乱・亀裂を生むとして批判

物質代謝の亀裂

- 資本主義的生産は、それが大中心地に集積させる都市人口がますます優勢になるにつれて、一方では、社会の歴史的原動力を集積するが、他方では、人間と土地とのあいだの物質代謝を攪乱する。すなわち、人間により食料や衣料の形で消費された土地成分の土地へ帰ることを、したがって土地肥沃度の持続の永久的自然条件を攪乱する。こうして資本主義的生産様式は、都市労働者の肉体的健康と農村労働者の精神生活を同時に破壊する。
- 大土地所有は、社会的な物質代謝と自然的な、土地の自然諸法則に規定された物質代謝の連関のなかに修復不可能な亀裂を生じさせる諸条件を生み出すのであり、その結果、地力が浪費され、この浪費は商業を通じて自国の国境を越えて遠くまで広められる。

本源的蓄積

- 本源的蓄積 = 資本主義の前史
 - 生産者の生産の客体的条件からの切り離し
= 『経済学批判要綱』では、物質代謝における自然からの「分離」が問題視され、前資本主義社会の奴隷や農奴の「統一」と対比されている
- 「生きて活動する人間たちと、彼らが自然とのあいだで行なう物質代謝の自然的、非有機的諸条件との統一、だからまた彼らによる自然の取得は、説明を要するものではなく、あるいはどんな歴史的過程の結果でもないのであって、説明を要するもの、歴史的過程の結果であるのは、人間的定在のこの非有機的諸条件とこの活動する定在とのあいだの分離、すなわち、賃労働と資本との関係においてはじめて完全なかたちで措定されるような分離である。」（草稿集②：140）

本源的蓄積

- 本源的蓄積は人間と自然の物質代謝に本源的な亀裂をもたらすものである。
- 資本主義の発展はいわばそれを激化させる
- 本源的蓄積を人間の側（労働者階級の形成、大衆の窮乏化）としてだけみてはならない
- むしろ、同時に人間の自然との関わり合いの変化をもたらす物質代謝の変容としても読むべき

Stefania Barca, *Forces of Reproduction*

- ‘from a historical-materialist perspective, the working class, or proletariat, and metabolic rift originate from a unique, global process of violent separation of people from their means of subsistence, which also disrupts the biosphere. The ecological crisis is thus a direct consequence of class making’.
- Samir Amin, in *Modern Imperialism, Monopoly Finance Capital, and Marx’s Law of Value*: ‘Marx concludes his radical critique in *Capital* with the affirmation that capitalist accumulation is founded on the destruction of the bases of all wealth: human beings and their natural environment’.

人工的希少性

- 資本主義は囲い込みによって、コモンズを解体していく
- 潤沢なものは価値をもたない（空気）
- それまで潤沢だったものを人工的に希少にすることが目指されるように
- 商品化 = 価値増殖のチャンス
- ところが、商品化によって貨幣をもたないものはアクセスを奪われる（森林、水、農地）
- また、希少性を作り出すために破壊・浪費も横行
- 私財の増加が公富の減少を伴う（ローダデールのパラドックス）

潤沢さとは

- これまでこの一節は生産力至上主義の典型としてみなされてきた
- 豊かさ = 労働者階級も自然から湧き出る富を大量消費することで、平等が実現される
→ そのような豊かさは自然制約を無視している
- けれども、それではマルクスがなぜ『資本論』ですでに物質代謝の亀裂を批判していたのかが、突如として理解できなくなってしまう
- 「ブルジョア的権利の狭い視界」に囚われた豊かさにすぎない

ラディカルな潤沢さ

- Radical abundance
= ローダデールのパラドックスをひっくり返すことで回復される潤沢さ
- 私財を減らし、公富 = コモンを増やす
- 貨幣に依存しない豊かさ
- 単なる物質的な潤沢さ (= 消費主義) ではない = 協同的富の創出
- Communismの基礎はcommon
- 〈コモン〉とは? = 私有でも、国有でもない第三の道
- 私的所有や商品に溢れた社会から共同所有・脱商品化を目指す
- シェアして、自分たちで自治・管理する実践

非西欧・前資本主義社会

- 前資本主義・非西欧社会の研究も同時に行っていた
- ゲルマン民族・マルク協同体
- 古代ローマ
- アメリカのイロコイ連邦
- インド、アルジェリア、南米
- ロシア・ミール

晩年のマルクス

- なぜ晩年のマルクスは自然科学と非西欧社会という一見すると関係のないテーマを同時に研究したのか？
→誰も答えていない問い
- マルクスは、マルク協同体のなかにも「社会主義的傾向」を見出した
- 土地の平等な割り振り・富の偏在化防止・土地や生産物の売買禁止
- 非西欧・前資本主義社会においては、人間は全く異なった自然との物質代謝を社会的に組織していた＝持続可能
- 平等と持続可能の連関

ザスーリチ宛の手紙

- 最晩年のマルクス

→ 西欧中心主義から脱却しただけにとどまらない

- 資本主義は「西欧でも、アメリカ合衆国でも、労働者大衆とも科学とも、またこの制度の生み出す生産力そのものとも闘争状態にあり、一言でいえば危機のうちにある。…その危機は、資本主義制度の消滅によって終結し、また近代社会が最も原始的な類型のより高次の形態である集団的な生産および領有へと復帰することによって終結するだろう。」

→ 一定常型経済であった前資本主義社会を高く評価し、それが平等で持続可能な社会を、西欧でより高次の段階として実現するためのヒントとなる

脱成長コミュニズム

- 最晩年の「脱成長コミュニズム」 = ラディカルな平等主義

- これまで相容れなかった脱成長とマルクス主義の統合

① 資本主義の内部で脱成長・定常経済を実現しようとするものの限界

② マルクス主義が克服することのできなかつた生産力至上主義

- 持続可能性と平等のために、経済をスローダウン・スケールダウンさせる

- 「物質代謝の亀裂」の修復に向けたヒント

→ マルクス自身も十分に展開できなかつた晩期のコミュニズム構想

脱成長コミュニズムの柱① 使用価値経済への転換

- 価値増殖だけを優先し、「売ればいい」というやり方で、必要のないものばかりが生産される
 - コストカット、効率化などによって余裕のない生産体制
 - 人々のニーズを充たす経済システムへの転換
- 経済成長よりも、社会の繁栄を重視する = 脱成長経済
 ×人々が欲するのであれば、いくらでも作っていいわけではない
 = 限界の設定 = より一層使用価値を重視しないといけない

脱成長コミュニズムの柱② 労働時間の短縮

- 技術革新も必要なく、すぐにでもできる対策 = 労働しない
 - 広告、マーケティング、パッケージング、投資銀行、コンサルなど必要のない仕事をやめる
 - 24時間営業や年中無休もやめる
- 生産力をこれ以上上げることなしに、社会的な労働時間の大幅な短縮
- ワークシェア

脱成長コミュニズムの柱③ 画一的分業の廃止

- 生産力の増大には限界がある
→労働からの解放を目指すのではなく、労働そのものをもっと魅力的なものへと変えていく必要がある
- 「精神労働と肉体労働の対立」の廃止
- 「労働そのものが第一の生命欲求」になる（「ゴータ綱領批判」）
- 「全面的な発展」は分業と相容れない
- 平等な作業ローテーション、やりがい、地域貢献などの重視
→スローダウンの契機

脱成長コミュニズムの柱④ 生産過程の民主化

- 「資本の専制」を脱却し、生産の民主化＝「アソシエーション」による「社会的所有」（ex. ワーカーズコープ）
- 株主の利害優先のトップダウンの押し付けではなく、話し合いによる意思決定
＝意見が違ふことがあっても無視することはできない＝スローダウンの契機
- 逆に民主化することによって、より革新的なイノベーションが起きる可能性もある（「一般的知性」）

脱成長コミュニズムの柱⑤ エssenシャルワークの重視

- エssenシャルワーク
→ ケア労働 = 労働集約型による経済の減速
- コミュニケーションに依拠する労働は生産性を上げることを目指すとむしろ質が劣化してしまう
- ケア労働 = 低炭素
- 資本主義の矛盾がもっともはっきりと表れている (cf 高給取りの「ブルシットジョブ」)